

集団活動に困難を示す幼児における指示従事場面の観察

○久保愛恵 (茨城大学大学院教育学研究科) 平野晋吾 (福山市立大学教育学部) 田原 敬 (茨城大学教育学部) 勝二博亮 (茨城大学教育学部)
 KEY WORDS: 幼児 集団場面 指示従事

【目的】

近年、保育の現場では、いわゆる「気になる子」や「グレーゾーン」といわれる子どもたちに対する理解と支援の在り方への関心が高まっている(久保山ら, 2009)。先行研究においては、「気になる」点として多動性や対人関係・コミュニケーションといった社会性の問題が多く取り上げられている(本郷, 2005; 岡村, 2011)。しかし、「気になる子ども」の中には「制作などで説明通りにできない」、「注意している内容を理解しているのかどうかわからない」(古市, 2009)、「指示が通りにくい・理解力が弱い」(中島ら, 2012)等のように社会性の問題以外の行動特徴も挙げられている。

そこで、本研究では指示従事を中心とした集団活動に困難のある幼児の行動を観察し、教師の指示の出し方と指示従事行動との関係を明らかにすることを目的とした。

【方法】

1. 対象児

A 幼稚園年中の男児(以下、B 児)を対象児とした。児の特徴として、自分の要求を指さしや単語で伝えることができる一方で、自分の興味を優先する傾向にあり、周囲の状況に応じて行動することを苦手としていた。また、4歳8か月時に新版 K 式発達検査を実施したところ、全領域は3歳3か月であった。認知面においては、図形の違いを見比べたり、視覚情報を基に模倣することを得意としていた。一方で、言語面では獲得している概念の不足や偏りがうかがえ、特に抽象性の高い語彙の理解に困難を抱えていた。また、検査全体を通して、具体物を用いた課題に対しては集中して取り組むことができていたが、口頭のやり取りのみの課題では、検査者からの問いかけに対しても反応のないことが多い点も特徴的であった。

2. 観察日時

20XX 年 12 月に A 幼稚園を 2 回訪問し、自由保育場面、設定保育場面、昼食の場面を中心に観察した。

3. 観察の観点

観察に際しては、教師がクラス全体あるいは B 児に個別に指示を出す場面に関して、①指示の対象(集団に向けたもの/B 児に向けたもの)、②指示の種類(口頭指示のみ/口頭指示+具体物の呈示/口頭指示+身体的誘導)、③指示従事の結果(指示に従った/指示に従わなかった)、④具体的なエピソードについて、その都度筆記記録を行った。

【結果および考察】

1. B 児が指示に従事した割合

上述の手続きに基づいて観察した結果、教師が指示を出す 31 の場面が抽出された。そのうち 7 場面(全体の 22.6%)において B 児は教師の指示に従うことが可能であった。以下では、指示に従事した場面と従事できなかった場面に関して、その際の教師の指示の出し方(指示の対象及び指示の種類)との関係について述べる。

2. 指示の対象と指示従事との関係

31 の場面を「指示の対象」及び「指示従事の可否」に着目してクロス集計を行い、Fisher の直接確率検定を実施した結果、有意であった($p=0.0002$; Table 1)。以上より、指

示に従事した場面では個別指示が多いが、指示に従事できなかった場面では集団に向けたものが多いということが明らかとなった。

集団に対する指示への従事が困難であった原因として、B 児の注意が指示や教師に向いていなかったことが挙げられる。観察されたエピソードをみると、「教師から片付けや整列をするよう指示があったにもかかわらず、行っていた遊びをやめることなく続けている」といった場面が多く観察された。その際、教師は集団に対しての指示が多く、指示そのものが B 児に届いていなかったものと思われ、結果として教師の指示に注意を向けることが難しかったものと推察される。特に、園の音環境はかなり喧騒であるため(川井, 2016)、指示を聴取するためには、より大きな注意の配分が必要になることが推察され、これが指示従事への行動に影響を及ぼしたと考えられる。

一方、個別指示は、安富ら(2011)や徳田ら(2008)においても、指示従事を生起させるための必要条件とされており、注意を向ける対象が明確であり、集団に対する指示と比べ、指示自体が B 児にも確実に届いていることが影響したと考えられる。

3. 指示の種類と指示従事の関係

同様に、「指示の種類」及び「指示従事の可否」についてクロス集計を行い、Fisher の直接確率検定を実施した結果、有意であった($p=0.0001$; Table 2)。また、調整済み残差分析を行った結果、指示に従事した場面では身体的誘導も併せて行っていた場面が多く、口頭の指示のみの場面が少ない一方で、指示に従事できなかった場面ではそれらが逆転していた。

新版 K 式発達検査の結果から、B 児は視覚的な理解に比べ、言語面の理解に困難を抱えていることがわかる。そのため、口頭での指示理解に難しさがあったものの、身体的誘導が加わることで、指示の内容に対する理解も深まったと考えられる。また、上述したように、B 児は注意の切りかえに困難を抱えていることが予想される。口頭の指示のみでは活動を開始するタイミングや、注意を向ける対象を適切に理解することが困難であっても、身体的誘導があることで、それらのタイミングを適切につかみ、注意の切りかえが行いやすくなったと考えられる。

(KUBO Manae, HIRANO Shingo, TABARU Kei, SHOJI Hiroaki)

Table 1 指示の対象と指示従事との関係

	個別	集団
指示に従事した	6	1
指示に従事できなかった	3	21

表中の数値は場面数を示している。

Table 2 指示の種類と指示従事との関係

	指示のみ	指示+具体物	指示+身体的誘導
指示に従事した	1 (-3.8)	2 (1.0)	4 (4.0)
指示に従事できなかった	21 (3.8)	3 (-1.0)	0 (-4.0)

表中の数値は場面数を、() 内の数値は調整済み残差を示している。